



「上野の山」をめぐる

特集展示

2024 2/21(水) — 25(日) 東京都美術館 2階第4公募展示室

上野といえば、美術館や芸術、桜や花見というイメージを持つ方が多いと思われます。上野の代表的場所のひとつである上野公園一帯は、武蔵野台地の端に位置し、「上野の山」とも呼ばれています。

江戸時代において、上野は現代と同様に桜の名所でしたが、寛永寺や子院などの寺院が数多く立ち並び、現在の様子とは大きく異なりました。さらに、寛永寺の近くに上野東照宮が建立されるなど、上野は徳川将軍家の宗教的な聖地と言える場所でした。

しかし、慶応4年(1868)の上野戦争により、寛永寺の伽藍など大半が焼失し、一面焼け野原となります。その跡地に病院の建設が計画されますが、視察に訪れたオランダ人医師・ボードワンの提言により、明治6年(1873)に公園に指定され、上野公園が誕生しました。そして、明治10年(1877)に第1回内国勸業博覧会が開かれると、上野は文化の拠点として数多くの博覧会や展覧会の開催地となりました。現在でも美術館など多くの文化・教育施設が集まり、芸術文化を楽しむ場所として人々を魅了し続けています。

そこで、特集展示として錦絵や絵葉書などの江戸博コレクションから、上野の風景や歴史をご紹介します。現代の風景と比較しながら、その移り変わりをご覧ください。

- [主な参考文献]
- 吉見俊哉『博覧会の政治学 まなざしの近代』中央公論社 1992
 - 『台東区史』台東区 2002
 - 小野良平『公園の誕生』吉川弘文館 2003
 - 國雄行『博覧会の時代—明治政府の博覧会政策—』岩田書院 2005
 - 浦井正明『上野寛永寺 将軍家の葬儀』吉川弘文館 2007
 - 浦井正明『上野公園へ行こう—歴史&アート探検』岩波書店 2015
 - 高橋千晶、前川志織編『博覧会絵はがきとその時代』青弓社 2016
 - 鈴木健一『不忍池ものがたり—江戸から東京へ』岩波書店 2018



特集展示「上野の山」をめぐる
編集・発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館
令和6年(2024)2月21日発行

第1章 徳川将軍家の聖地

「上野」という地名の由来は諸説あり、定説では現在の上野公園一帯が丘陵で、台地の上が野原であったことから、その名が付けられたとされている。戦国時代に関東を治めていた北条氏が作成した永禄2年(1559)の記録「小田原衆所領役帳」のなかに、「江戸 上野」という記述があり、これが地名として「上野」と明確に確認できる最初のものと言われている。

寛永2年(1625)、天海が寛永寺を創建したことで、上野はそれまでとは一変し、寛永寺と子院が立ち並ぶ宗教的空間となる。一方で、江戸随一の桜の名所としても知られ、庶民が寺院に参拝し、花見を楽しむという行楽地としての側面も持っていた。

第1節 名所上野

現在と同様、上野は花見の名所として多くの人で賑わっていた。桜の木は、寛永寺を開山した天海が吉野山から移植したことに始まり、その後、天海の門弟らによって少しずつ増加した。また、寛永7年(1632)に幕府の儒学者・林羅山が三代家光から上野(忍岡)に屋敷地を拝領し、寛永9年(1632)には孔子を祀る先聖殿を建立すると、敷地内や周囲に桜樹を植栽したとされている。

上野の桜は、寛文年間(1661~1672)には四代家綱の耳に入るほど評判となり、元禄年間(1688~1703)には江戸随一の桜の名所として愛された。



「名所江戸百景 上野の山内月のまつ」歌川広重／画 安政4年(1857)8月



「東都上野花見」歌川広重(二代)／画 安政6年(1859)10月

第2節 上野東照宮

生前、徳川家康は自分の死後、遺体は静岡の久能山、葬儀は芝の増上寺、位牌は岡崎の大樹寺に納め、一周忌過ぎたら日光に小堂を建てて勧請するよう遺言していた。元和2年(1616)家康が駿府城で死去すると、二代秀忠はその遺言に従い、遺体を久能山に埋葬して翌年には後水尾天皇から「東照大権現」の神号が勅許された。そして日光に東照社(日光東照宮)を勧請すると、正保2年(1645)には宮号宣下により東照宮となり、伊勢神宮と石清水八幡宮に並ぶ格式を得た。

東照大権現として神となった家康を祀るため、幕府だけでなく全国の諸大名や庶民が東照宮を勧請するが、その一つに上野東照宮が挙げられる。上野東照宮は天海が寛永寺を建立した際、かつてその地に屋敷を持っていた藤堂高虎が幕府に願って勧請し、徳川御三家らの協力のもと、寛永4年(1627)に完成した。慶安4年(1651)には三代家光が増築し、現在の形となる。なお、上野戦争や関東大震災の被害を免れ、江戸時代のままの建築であることから、社殿は国指定重要文化財に指定されている。



「東京開華名所図繪之内 東叡山内東照宮」歌川広重(三代)／画 明治時代中期



「上野東照宮積雪之図」小林清親／画 明治12年(1879)7月

第3節 寛永寺

徳川家康の神格化を主導した天海は、かねてより関東における天台宗の一大拠点として江戸に築こうと構想していた。元和8年(1622)、二代秀忠から上野の台地の半分を与えられると、天海は品川の御殿山にあった別殿を移築し、寛永2年(1625)に寛永寺の本坊(現・東京国立博物館敷地内)を建立したことで、その構想を実現した。

寛永寺創建にあたり、天海は天台宗総本山・比叡山延暦寺を模倣しようとした。すなわち、京都御所から見て比叡山が鬼門(北東)にあたるように、江戸城の鬼門となる上野の地を選んだのである。そして、寛永寺の山号を「東の比叡山」という意味から「東叡山」としたことから、天海の意思が垣間見える。

創建当初は幕府の安泰と万民の平安を祈願する祈祷寺であったが、三代家光が自らの法要を寛永寺で執行するよう遺言し、その後四代家綱や五代綱吉の霊廟が造営されたことで、寛永寺は徳川家の菩提寺と位置付けられた。そして、上野は徳川将軍家の宗教的聖地となっていく。しかし、幕末には戊辰戦争の舞台の一つとなり、寛永寺の伽藍の大半は、灰燼に帰すこととなる。



「四斤山砲 砲弾」江戸時代末期 江戸東京たてもの園蔵



「徳川家斉葬列絵巻」(部分)江戸時代末期



「寛永寺御表方御霊屋 蔽有院中門と宝塔」明治時代初期



「寛永寺一之御霊屋 水盤舎」明治時代初期



第2章 近代の上野と博覧会

慶応4年(1868)5月、旧幕臣を中心に構成された彰義隊と新政府との間で上野戦争が発生し、上野の山は焼け野原と化した。その跡地には紆余曲折を経て、明治6年(1873)に公園に定められた。

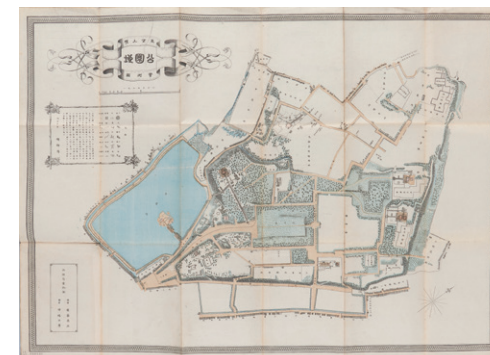
公園となった上野の山は、徳川将軍家の宗教的聖地から政府の近代化政策の拠点へと変化するが、なかでも内国勸業博覧会をはじめとする博覧会の開催地として数多く選ばれた。その影響は現在も色濃く残り、園内には東京国立博物館をはじめ、国立科学博物館、上野動物園、東京都美術館などの文化・教育施設が密集している。

第1節 上野公園の風景

上野戦争で多大な被害を受けた寛永寺の寺域は、医学校や病院の建設予定地とされていた。しかし、明治3年(1870)に上野を視察したオランダ人医師・ボードワンの提言により、寛永寺(上野公園)は浅草寺(浅草公園)、増上寺(芝公園)、富岡八幡宮(深川公園)、飛鳥山(飛鳥山公園)とあわせて、明治6年(1873)に公園として選定された。明治9年(1876)に東京府から内務省に移管されると、翌年には第1回内国勸業博覧会が開催された。これ以後、上野公園は博覧会の開催場所選ばれ、それとともに公園の整備が進められた。



「上野山王台故西郷隆盛翁銅像」藤山種芳/画 明治32年(1899)3月18日



「東京上野公園地実測図」地理局量地課/作 明治10年(1877)



「東京真画名所図解 上野競馬」井上安治/画 明治時代前期

第2節 博覧会の聖地から文化の杜へ

明治時代の初め、政府は内務卿・大久保利通を中心に殖産興業政策の一環として、博覧会事業を推進した。岩倉使節団や海外の万国博覧会への参加を通して、博覧会が産業奨励に有効な手段であることを認識した政府は、国内規模に留めた内国勸業博覧会を上野公園で開催した。

明治10年(1877)に開催した第1回は、西南戦争やコレラの蔓延により、財政的な成功を収めることはできなかったが、産業を奨励するという意味では内国勸業博覧会の有用性を示す結果をもたらした。そのため、4年ごとに内国勸業博覧会を開催することが決定し、第3回までは上野公園で行われた。財政悪化を理由に大阪で開催された第5回を最後に、内国勸業博覧会は終焉するが、その後も上野公園ではさまざまな博覧会が開催されることとなる。

そして博覧会の聖地であった上野は、博物館・美術館をはじめとする文化・教育施設が集まる「文化の杜」として、現在も多くの人で賑わいを見せている。



「東京勸業博覧会 展望観覧車」明治40年(1907)



「東京勸業博覧会之光景」明治40年(1907)5月



「東京上野公園内国勸業博覧会美術館荘飾之図」歌川広重(三代)／画 明治10年(1877)

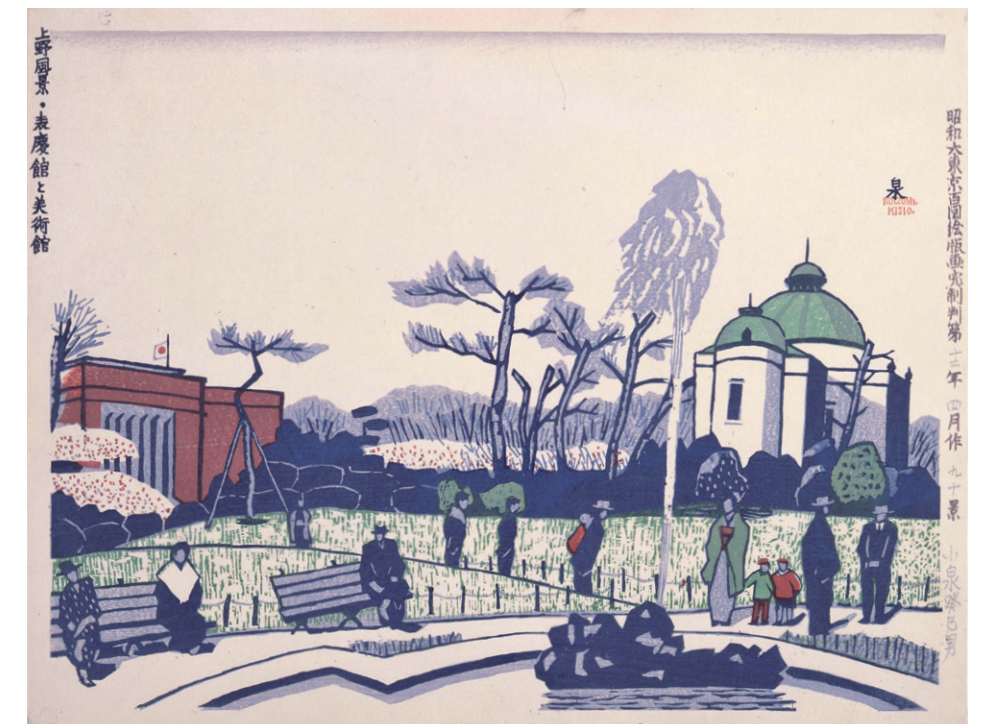
上野公園で行われた主な博覧会

各博覧会の事務報告をもとに作成

名称	会期	入場者数
第1回内国勸業博覧会	明治10年(1877) 8月21日～11月30日	45万4168人
第2回内国勸業博覧会	明治14年(1881) 3月1日～6月30日	82万2395人
第3回内国勸業博覧会	明治23年(1890) 4月1日～7月31日	102万3693人
東京勸業博覧会	明治40年(1907) 3月20日～7月31日	680万2768人
東京大正博覧会	大正3年(1914) 3月20日～7月31日	746万3400人
平和記念東京博覧会	大正11年(1922) 3月10日～7月31日	1103万2584人
大礼記念国産振興東京博覧会	昭和3年(1928) 3月24日～5月27日	223万3487人
万国婦人子供博覧会	昭和8年(1933) 3月17日～5月31日	75万9384人



「御大礼記念国産振興東京博覧会 上野公園 入口大門塔」昭和3年(1928)



「昭和東京百景絵版画 第九十景 上野風景・表慶館と美術館」小泉癸巳男／画 昭和12年(1937)4月